

# 獨協医科大学看護学部 紀要 2007

序 文

学 長 寺 野 彰



この度、看護学部2007年度「紀要」が完成したことに対し、心からお慶び申し上げます。考えてみれば、本学部が開設されてからわずか1年で「紀要」が上梓されたのですから実に驚くべきことなのです。現在ようやく第1期生が2年生になったばかりで、初期教育に没頭されている教員の皆様がかくも研究にも重点を置かれていたということに私は深い驚きを感じるものです。

本学に看護学部を設けたいということは、以前から看護師諸君をはじめ大学全体の切なる望みでありました。それは、全国に看護大学、看護学部が陸続と開設され、栃木県にも本学を挟む形で2つの看護学部ができたという事実のみによるものではありません。高度な知識・技術に優れることはもとより、患者さんに思いやりを持つことができる良質な看護師を養成するには、現代では4年生の大学にする絶対的な必要があったのです。しかしながら、状況は直ちに学部を設置することを許さず、一時凍結状態にあったのですが、小生が学長になったとき、強い要望の下、学部設置を決断しました。しかしながら、「言うは安く行うは難し」の格言通り、学部開設に至る道は茨の道でありました。建物などのハード面にも苦勞しましたが、皆さんごらんになるように素晴らしい校舎が完成し、全国的にも誇れるような設備も揃えることができました。問題は優れた教員を如何に集めるかということでした。これは35年前、医学部を作るときにも同様の苦勞をされたようです。血の出るような苦勞の末、現在のような優秀な教員に参加いただいたわけで、正直ほっとしている次第です。

この教員採用の過程での一つの問題は、教員の業績でありました。開設に当たり、教員は、看護師であること、看護学部での教育歴のあること、さらに一定の看護学における業績を有することということです。特に最後の業績は、もちろん医学部においても大きな問題となるのですが、ちょっと勝手に違ったというのが正直な気持ちです。医学部で業績というと、英語の一流国際ジャーナルに論文を出すことでありますが、看護学にもそのような論文があるにしろ、まだ国際化には至っていないのが現実だと思います。いずれ近い将来、看護学論文もそのような傾向になるのかもしれませんが、現在小生の把握している範囲では、originalityは重要としても、総説的な論文も十分評価されるということです。そうであれば、本学でも看護学に関する教科書などをどんどん作っていく必要があるのではないかと思います。最近小生も、コメディカル向けに「シンプル内科学」(南江堂)を編集出版いたしました。このような教科書を看護学各分野でどんどん出版していくことは十分可能だと思います。そうすれば、本学看護学部の業績が飛躍的に上昇すると思うのです。本学には最近発足した「獨協メディカル倶楽部」(理事長馬場廣太郎名誉教授)が出版にも大きな関心を持っているので是非とも協力して論文を出したいものです。それによって看護学部の「紀要」がますます豊かなものになり、全国的にも注目されるものになると確信しています。

最後に、このような短期間でこのようなすばらしい「紀要」を編纂された皆様に深い敬意を捧げ、お慶び申し上げます。

2008年4月